

薔薇屋敷の老婦人

hatuhi

彼は部屋を出て行こうとして、上司から呼び止められた。

「水上君、これから外回りか？」

「はい、今日は北の方へ顔見せに」

「気をつけて行ってこいよ。……悪いんだが、帰りに、澤見さんの様子を見て来てくれないか」

「澤見？」

聞き慣れない姓に首を傾げた彼に、上司は苦い顔をした。

「例の、バラ屋敷だ」

バラ屋敷。

その名前なら彼も知っていた。

先月、当の上司に連れられて行き、見事な門前払いを喰ったのだ。インタホン越しに、私は元気で居りますので、ごきげんよう、と一言告げて、一方的に通話は切られた。顔を見るところか、門扉すら開けられなかった。

彼女は人間嫌いなのだと、帰り道、上司に教えられた。独居高齢者の様子確かめ、介護の様子や異変がないか、見回るのが仕事だから、好かれることも多いのだが、彼女だけはまだ一度も姿を見せたことがないという。敷地からするとそれなりの庭があり、外からもばらの花が見えるのだが、門扉は敷地内にあり、それより前にインタホンのついた柵が設置されていて、その横には郵便物のシューターがある。宅配荷物は届くし、薔薇の世話の手伝いをしている人もいる。たまに友人らしき数人が尋ねてくることもあるらしい。それなら、手伝いの人に様子を聞いてみれば、と提案したら、上司は苦い顔でもうやった、と言った。前任者が業を煮やして庭の手伝いに出入りしている人を特定し、せめて生活状況なりと聞き出そうとしたその三日後、裁判所から訴状が届いた、という。犯罪者を犯しているわけでもない自分のプライバシーを行政が侵害しているという内容で、代理人の弁護士はきわめて有能だったというわけだ。

「……今日はあっちの地区じゃないですよ」

帰り道に寄れないこともないが、あの老婦人の冷たい声に打たれるのは気が進まなかった。

「薔薇がすごい、花の季節になったら是非見に行きたいとか言ってたじゃないか」

「……それは、言いましたけど、澤見さんでしたっけ、あのひとが嫌がりますよ」

「どっちみち近々行かなきゃならん。が、俺は嫌われてるんだよ。俗物は嫌いだそうだ」

「は？」

「どうして様子を見るのがそんなに駄目なのかと聞いたら、俗物は嫌いなんだそうさ。特に俺が悪いわけじゃなく、人間の九割が俗物、そこから離れたくて一人でいるんだそうさ。……水や

植物のほうが好きらしい」

「でも、庭の手入れの手伝いに入る人もいますよね？」

「どうやらその人も俗物とは言い難い浮世離れした女性だったそうだ。こちらは特に人間嫌いというわけではないらしかつたが、例の裁判以降以降彼女と接触するわけにもいかなくなってな」

「……………つまり、俗物というのは、普通の人間ってことですか？」

「そういうことだ。人間の中では暮らせない、そういう人もいるんだと医者が言ってたな」

「医者？」

「ああ、精神科医だ。おかしいんじゃないかと思ってこれまた問い合わせたことがあったんだが、彼女はどうやら重度の対人適応障害のようだな。友人がいるらしいから、まあ孤独死の心配はないのが救いだが」

「対人適応障害で友達って変じゃないですか？」

「一部、大丈夫な人間がいるってことだろ。お前が大丈夫かどうかはわからんが、薔薇見に行つてこい」

「……………わかりました」

確かにあの庭の薔薇、それは魅力的だった。

外観があれなら、中はどれほど美しく整えられているだろう。

婦人の性格を映して、野趣溢れる庭かもしれない。

見れるものなら、確かに見たい。

「でも、期待しないでくださいよ、課長」

「今のところ全滅だからな、してない」

彼は苦笑して、続けた。

「君が薔薇好きだということからついでだ」

「では薔薇見物に行つてきます」

市庁舎から出れば、田舎のここでは緑がまぶしい。

「とりあえず仕事だな」

彼は車に乗り込み、走り出した。

初仕事の顔見せは順調だった。順調すぎて、帰り際には見事に十五時を過ぎていた。夕暮れ前にバラ屋敷に行ける、と、彼は車を走らせ、そして奥まった緑の中にある溢れるような春の花々に息をのんだ。

夢見心地で車を止め、そして西に傾いた日ざしの中、咲き誇る花に心を奪われる。

インタホンのことさえ忘れて、外に面した数メートルを二往復し、そしてインタホンにさしかかったところで、声がした。

「他人の家の前でうろうろするものではありませんよ、貴方」

驚いたことに、平板な冷たい声ではない、怒ったものでもない、明らかに笑いを含んだ声だった。

「す、すみませんっ！」

彼は慌てて頭を下げる。思わず我を忘れてしまっは元も子もない。慌てたあまり彼女の声の調子すら聞き落とした。

「つい、薔薇があまりに美しくて、先日お伺いした時に是非見てみたいと思っていたよりずっときれいで、先にお断りするべきでした」

「先月いらしたわね、確か老人福祉課の課長と一緒に」

「はい、今年から市役所に入った水上といいます」

「水上さん、あなた、薔薇がお好きなの？」

「はい、男なのに褒だってよく言われるんですけど、実は花が好きで……」

「お入りなさい、折よく遅咲きの桜も満開よ、春の薔薇のお茶にお招きしましょう」

彼女の声と同時に、柵が開いた。

思わず目を瞬いた彼に、穏やかな声が笑う。

「市役所の方でははじめてだわね。バラ屋敷の庭にようこそ」

「おじゃま、いたします」

彼は深々と一礼し、おずおずと、柵の上の段をのぼった。

そこからは、緑と花に覆われた空間だった。

早咲きのクレマチスが日陰に咲き、薔薇が、色とりどりに咲き誇っている。地面にはすみれや、時には蒲公英までが覗き、クリスマスローズが濃い緑の茂みに落ちついた色の花を咲かせている。緑のトンネルを抜けると、クローバーの混じったカモミールのじゅうたんの上に、たわわな花を溢れるように咲かせる薔薇がどこまでも続いているように見えた。

まさに、薔薇の園そのものだった。

秘密の花園に迷い込んだような心境で、おそろおそろ足を進めて行くと、ぱっと視界が開けた。

淡いピンクの花で煙るような桜の木と、蔦と木肌が混じった家、そして比較的小さな薔薇で彩られた庭に、テーブルと椅子が出されている。

そこには、上品な緑の服の中年の女性が座っていて、白髪混じりの髪を軽くまとめた生成り色の飾り気のないワンピースの婦人がティーポットを持って新しいカップにお茶を入れていた。

「あら、やっと辿り着かれたわ」

座っていた女性が笑った。

「紅茶がさめる前で良かったわね、水上さん、いらっしやい。紅茶はお嫌いじゃなければいいのだけど」

「いえ、好きです。ここまで、秘密の花園みたいでした」

少年のように興奮しているのが自分で分かる。

自然は好きだし花は好きだけれども、この庭は本当に素晴らしい、と素直に思ったのだ。

「お招きありがとうございます、ええと、……」

「こちらは庭の世話をお手伝いしていただいている董さん。私はどうも気にムラがあって、何人

かの方に助けていただいています。市役所でも把握しておられるようですけどね」

「課長から、失礼をしたことがあると今日はじめて聞きました。申し訳ありません」

「あらあら、あなたが謝るようなことじゃないわよ、ねえ、霞さん」

緑の服の、董と呼ばれた女性は、自分のことでもないのに笑った。

「澤見さんはかすみさんとおっしゃるんですか」

「霞を食べて生きているからってついた名前よ。もう本名なんて誰も覚えていないわね。あら、水上さんをご存知かしらね？」

そうって、椅子に座った彼にカップを差し出した婦人は、不思議な雰囲気を持っていた。

確かに年輪を重ねているのは分かるけれど、顔そのものは穏やかで声も落ちついている。どこか少女のような雰囲気さえ漂うのは、ワンピースにさりげなくつけられているレースのせいかもしれないが、全く違和感がない。細すぎもしないがふくよかともいえないごく普通の体型なのに、おばさん、おばあさん、と、今日何度も口にしてきた呼び名が使えない。

「あら、ミルクティーになさるのね？」

ごく自然にミルクを注いだ彼は、慌てた。

「あ、すみませんお断りもせず」

「いいのよ、薔薇の庭に紅茶ならミルクを入れるのは当然だわ」

「あなた、霞さんのお眼鏡にかなったわね。若い人では今時珍しいこと」

「よく言われます。若いのにめずらしい、とか、男なのに変、とか。………本当は大学も実家も首都圏なんですけど、僕はどうも小さい頃からこういうところの方が好きだし、古いものや古い家も好きで………こちらのお屋敷も素敵ですね」

「ほうら、ね、董さん。このかた、素敵とかきれいとか美しいとか、ためらいなく口にされるの。それこそ、「素敵」だわ」

課長をインタホンで追い払ったのと同じとは到底思えない、少女のような笑い声は、澄み切って、頭上の桜を震わせるようだった。

応えるように、桜の花びらがはらはらと、落ちて来る。

「桜が一番好きな木」

うたうように、彼女はいう。

「でも並木は嫌い」

「ふふ。水上さん、だったわね。霞さんはとても心が広いけれど………そうね、人にはとても厳しい。でも、一度こうして入れていただくとこんなに素晴らしいひとはいないと思うわ」

「誉められているのかしら？ 貴方の課では私は厄介者ではないの？ いつも門前払い、どうしてか、と聞けば、俗物は嫌い、と申しましたし、お友達に迷惑がかかったときはあっさり弁護士に依頼するし」

「………正直に言えば、その通りです。でも、解る気がします。………たとえば、あの夢みたかった入り口に、蒲公英が咲いてたんです。ちょうど、董も」

「あら。まあ」

「課長がもしあれを見たら………いえ、気付かない気がします」

「よくお分かりだこと。そう、そういうところに気付く方ならどなたでもいいのに……どうしていらっしやらないんでしょうね？そのほうが私には不思議でたまらないの」

呟くような彼女の声を聞きながら、彼は名残惜しそうに紅茶を飲み干した。

「ごちそうさまでした。そろそろ僕は戻らないといけません」

「そうね、そろそろ夕方ね」

「あの。また、お訪ねしてもいいでしょうか。力仕事なら手伝えますから」

「あなたがあなたである限り、バラ屋敷は歓迎しますよ」

「市のほうも、僕の担当にさせてもらっていいですか？」

「あの課長さんがいいと言うならどうぞ」

老婦人、と呼ぶには些か躊躇いのある、バラ屋敷の女主人は笑った。

印象的な、優しい笑顔が、夕映えの中に美しく見えた。決して美人ではないけれど、時が彼女を美しくしていくのだろう。

「おふたりとも、楽しかったです。ありがとうございました」

彼はもう一度頭を下げ、そうしてきた道に戻った。

蒲公英はしぼみかけ、夕陽を受けて薔薇は深い色に輝いている。

そうして、開いた門扉が後ろで閉じられ、柵が閉じられて、道路と車を見て、彼は今までいた美しい世界と現実とのギャップに、軽く目眩を覚えた。

薔薇屋敷の老婦人

<http://p.booklog.jp/book/68740>

著者 : hatuhi

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hatuhi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/68740>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/68740>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ